



とても効率が 良い委員会

公民館報は年6回発行される。委員会を一つの号につき2回開く。

発行2か月前の会議で次号の記事を討議する。時事報告事項の掲載もあるが、基本的には全く白紙。何を記事にするか委員会で話し合う。住民が今知りたい情報とは？ 社会で起こっていることは庄内地区ではどうなの？ 毎回白熱の討議だが一時間前後の会議で要点も何とかまとまる。

発行1か月の会議で原稿の校正を行う。内容が大幅に変更されることも多い。より読みやすい構成に、誤解なく分かりやすい表現に、毎回真剣な討議だ。完成した館報は、会議で話し合われた変更点が見事に改善され、その仕上がりに感心する。編集委員会に関わる皆様、お疲れ様でした。

委員長

やってよかった編集委員会

想いそれぞれ

編集委員会は 話題のるつぼ

庄内地区の館報は掲載内容が定型化されておらず、編集委員にとってはそれが悩みの種だが、それはかえって私の視点を広く、深くすることに繋がっている。

ひとつの話題が会議に提示されると、各委員から様々な論点で意見や思いが語られる。私とは違った切り口での考え、思い、今まで知り得なかった情報も…

庄内地区住民でも町会が違っただけで意外と知らないことが多いと毎回感じる。それがとても新鮮で、私の感性を豊かにしてくれる。

館報の読者は決して多いとは思わないが、一人でも私達編集委員の思いと同じ視点で目を通してもらえたらうれしい。そして「こんな企画に取り込んでほしい」という住民からの意見が届くことがあればもっとうれしい。

M

公民館と 館報への想い

「読む人に何を届けたいのか」という館報の役割について悩み考えた私に、毎月の編集委員会での議論は多くの学びをもたらしてくれた。私は編集委員になるまで公民館とは関りはなく、その存在意義にも関心がなかったが、委員会が「引き金」となり、町会や地域のことを考えるようになった。

社会の分断が叫ばれて久しく、コロナ禍がそれに輪をかけている。スマホは「検索」に便利だが、公民館は「探索」には向かない。ただ「自分地域社会でより良い人生を生きたい」とは何か？

「探索」するには公民館での人との語らいが有意義であることを感じる。人と人の交わり・語らいを通じて生まれるであろう新しい「知」の経過を多くの事例として館報で紹介できたらうれしい。

Y

館報編集委員を やってみて

館報編集委員に指名された際、正直「私に編集委員ができるのだろうか」「仕事も夜遅くまであるのに参加できるのだろうか」とネガティブな事ばかり考えていました。

実際に参加してみて、出身地が松本市ではない私にとっては、地域の歴史や名跡をよく知らず、ろくに意見も出せませんでした。他の編集委員の方の意見を聞くことで庄内地区の歴史や名跡を聞く機会が出来、大変有意義な場であったと感じました。

コロナ禍以前は町会の行事等で、町会の方達から地域の歴史や出来事等を聞く機会がありました。最近町会の方達との付き合いも絶たれてしまったところでした。編集委員の方達の話聞いたこと、交流できないことは私にとって大変良い体験となりました。

編集委員会で見聞きした事等を、町会の方達や子供達に話していきたいと思えます。

N

公民館報の意義

編集委員として会議に参加させて頂き、議論を通じて各町会の様子を知ることができました。館報の役割のひとつに、町会の方が集う行事の大切さ、子供達に伝統行事を引き継いで欲しいといったことが念頭にあることは確かだと思えます。

私が小学生の頃、父が地区の役員になった時のことです。父はバスを貸し切り、小学生をスケートセンターへ遊びに行く計画を立ててくれました。バスの中であいつより凄い人に見えたのを覚えています。今でも良き思い出であり、温かい気持ちになります。

近年は夫婦共働き・高齢化等、生活スタイルは変化しています。今まで通りの行事をすることに不安や負担を感じる方もいると思います。その為にもいろいろな角度からの意見に耳を傾けていきたいものです。

これからも公民館が安心で身近な場所である為に、館報を通じて発信していきたいと思えます。

N

編集委員 緊急募集中

町会役員等を やってみて

十五年ほど前、庄内地区に家を建て、松本市の住人となり、町会役員を引き受けました。何年か経つ内に町会の公民館役員となり、前任者が長年に渡って委嘱されていた「館報編集委員」も引き受けました。

当時、町会役員交代がなかなか進まない状況から、【町会役員】の一年任期化と【当番制】という役員負担減と、より公平な分担になる役員選出方法変更に関わりました。

が、「館報編集委員」は町会の公民館役員とセットではない為、当番制には含まれず、公民館役員交代後も自分が毎月の委員会活動に参加しています。

町会の公民館の鍵は各組長に分散・効率化し、実質「予定管理・イベント動員」という受け身の活動に対し、編集活動は、市の情報や委員との意見交換等【学ぶ楽しみ】があり、大変お薦めです。交代しませんか。 O

館報編集委員を 経験して

町会内の公民館長を受けて公民館長会に出席した際、会長さんから「館報編集委員を受けて貰えないか？」というお話がありました。私にとって初めての事でしたので、委員の皆さんの足手まといになるのではないかと心配でした。

しかし参加してみると、委員の皆さんの話は面白く、話題が豊富で大変勉強になりました。また、皆さんの文面の校正力に驚かされたので、私自身も原稿の執筆や校正を行う等、大変良い経験をさせて頂きました。

庄内地区で大きな行事の「ドリーム庄内」秋のついでに「防災運動会」にも館報の取材兼運営スタッフとして参加しました。競技を楽しむ子供達の笑顔や笑い声で元気ももうつと共に運営の楽しさも学ぶ事が出来ました。今思うことは、館報編集委員に関わりを持ってた事で、有意義な時間を過ごす事が出来たと感じています。編集委員会のスタッフの皆さんには感謝の気持ちでいっぱいです。 S

顔が見える地区

初めて公民館活動に参加して、なるほどな、と思っただことは、かつて松南地区と庄内地区との合同による館報編集委員会がなんなん広場で行われていた頃、その当時の担当主事に言われた一言でした。

「読む人が少ない公民館報でも、月一度委員会を開くことで、編集委員会全員の顔が分かるようになり、繋がりが生まれることが重要である」

この言葉が私にとって公民館活動の原点になっています。

館報編集委員会に参加していますと、地区公民館が行う事業に携わることが多くなり、数多くの人達と顔見知りになって、街角でも挨拶できるようになりました。

今後の館報編集委員会は、各町会からの15人体制で運営することが必要であり、15町会からの情報が集まりやすくなり、委員同士の交流も出てきます。

最後に、委員や役員は長く在任せず、後任の援護をすることである。 N

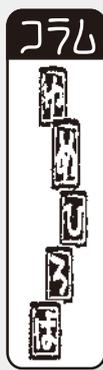
公民館活動を ふりかえって

コロナ前の町会年間行事予定表を見返してみると、スポーツ大会の打ち上げ、ふれあい会食会や敬老会、地域の伝統行事等、子供から大人向けまで多くの活動がありました。また、町会、小中学校PTAといった様々な団体が町会の公民館を利用しておりました。

しかし、令和2年春からのコロナ禍で公民館活動は大きな制約を受けました。予定表も町会の役員会が主で予約がない日が目立ちます。

さて、コロナ終息後の町会活動や公民館活動はどうなるのでしょうか。私の心配は、これまで伝わってきた行事が中止になると、次の世代に伝わらなくなることです。そうならないためにも一刻も早く元の生活に戻るよう願います。その日がきたら住民の親睦、各団体の活動を盛んにするのための知恵をみんなで見出さなければなりません。

最後に、館報編集委員会は他町会の様子を知る唯一の場であり、とても貴重な機会を頂きました。館報の読者や委員の成り手が増えることを願います。 F



私が小学生だった昭和30年頃、モノクロのテレビが普及しつつありました。しかし、各家庭に1台というわけにはいかず、テレビがある家庭に子供達が押しかけることがありました。その時、町会の会合で、「公民館にテレビを設置してPTA役員が交代で見守りをしてあげよう」ということになったそうです。

また、王・長嶋・金田正一らに憧れて野球をしたい子供が増えましたが、グローブが高価で買えませんでした。これも町会が野球道具を一式用意してくださり、その後、町会対抗の野球大会ができるようにもなりました。

現在、地域住民と学校が協働で子供達の教育に力を注ぐ「コミュニティスクール事業」が広がりを見せています。地域で子供を育てることはとても重要だと思えます。皆さまも機会があればぜひご参加を。

昔のように隣近所のみならず子供を育てる社会になってほしいですね。 T